
エンダ

日葵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

エンダ

【Nコード】

N8274X

【作者名】

日葵

【あらすじ】

繰り返される毎日に、気持ちがすり減る日々。何の為に、誰の為に生きているのかすら、分からなくなっていた。でも、だからと言って……ここから逃げ出して、この扉を開けるなんて、私には出来ない。

(注) 残酷な描写は無い予定ですが、一応設定しました。

別サイトで同作品を掲載しております。現在8章まで掲載中です。

第1章 Usual spot - 1

二年程前から、自分の存在価値について考え込むようになった。もっと言えば、全てが虚しい。生きる価値を見出せない自分に気づく。

一番の原因・・・それは分かっている。三年前、突然襲った母の死。それからだ、全てが虚しくなってしまったのは。亡き愛する人を思い出すのは辛い。辛いのに、毎日思い出さずにいられない。自宅のマンションで、缶ビールの蓋を開けた。アルコールの匂いが鼻に付くが、グイッと飲み干す。酒は強いほうだが、癖になると困るので飲むのは週二回と決めている。

『そんなルールを作っている時点で、もう駄目だっというか・・・』[□]

深い溜息を掻き消す様に、テレビからは延々と、騒々しい音が流れてくる。芸人が放つ言葉に、会場がワツと盛り上がっていた。一体何がそんなに楽しいのだろうか・・・眉間に皺を寄せながら、チャネルを変えてみるが、どこも同じような番組だ。特に意識して見ている訳ではないが、テレビの音に感情が紛れる。こんな割り当てられた空間に一人で居ると、無性に堪らなく漠然とした不安が襲うのだ。深く考えすぎるとロクな事がない・・・そう考えて、無意識にテレビを付ける。そうやって何年も何回も過ごしてきた。

『前は・・・良かったな・・・』

声に成らない言葉をグツと呑み込む。数年前は、家に帰れば母が居た。特に会話が無くても、得られたあの安心感や安らぎは、何物にも換え難い。

「一人になって気づいても・・・なあ」

私の母は本当に苦労人だった。働かない父親のせいで幼少の頃は、一日中働いている記憶しかない。貧しい幼少時代だったが、母の愛に包まれて育った私は、父の事だけが悩みの種で済んでいた。

母の記憶は、私の胸をこんなにも苦しくする。飲んでは暴力を振るう父親から、いつも守ってくれた母。無償の愛・・・母から受けたこの愛で、私はこの世界で生きる事が出来た。父親が病気で亡くなって、ようやくと親子二人で心穏やかに暮らす日々、

「いよいよこれから、お母さんの人生だよ。やりたい事やりなよね」

そう言葉にする私に、

「今までも自分の為に生きてきたわよ」

そう、そつと笑う人だった。もつと伝えたい事は沢山あったのに、三年前だ・・・あの日会社に掛かってきた電話によって、全てが一瞬で消え失せた。

【道に飛び出した子供を助けようとして・・・】
それ以上の言葉は、私の耳に届かなかった。

はあ・・・もう三年も経つのに、一体いつになったら、母の事を暖かい気持ちで思い出せるのだろうか。昨日まで話していた声が聞けなくなつて、大切な人が突然いなくなつて・・・。寂しい。虚しくて堪らないのだ。私はこれから、寂しく長い人生を送しかない、そう思わずにはいられない。

今までは、どんなに居た堪れない気持ちに陥つても、帰れば母がいた。そこには、私が帰る場所が確かにあった。それが当たり前だったあの頃。一人じゃなかった、あの頃。母の死後、私はこの都会でたった一人だ。生きて行くだけの人生を送っている。大げさと思われるかもしれないが、心の虚無感が私を負の感情へ押し流す。

それからの私は、
「孤独」

この言葉に、都度苛まれるようになった。

勿論今の状況は、母の事だけが原因ではない。仕事、友人、恋愛、結婚の事、全てにおいた将来の自分。女三十代。結婚の予定も

無い。あるとすれば、社歴だけが長くなる仕事だけだ。

生きていく以上は、どのような立場であろうと働かなければならない。それが社会だ、というか現実だ。実際、私の仕事は忙しいほうだと思う。毎日、毎年同じだ。数字の積み上げを行い、期限通りに仕事を上げなければならぬ。経理事務員として毎日二十一時位の帰宅時間となる。遅くも無いが早くも無く、そこから自分の為に何が出来るのだろうか？そんな余力があるのなら、明日の仕事の為に取っておきたい位だ。

一体誰の為に、何のために走り続けているのか？ 誰かに教えてほしい。私がどこに向かっているのか。・・・馬鹿な自分、そう思い自嘲気味に笑った。全ては自分が選択してきたくせに、と。

二本目の缶を開けて、ぼんやりと窓を見た。カーテンの隙間からは、暗い闇が見える。こんな空の下には、私みたいな人間はごまんという筈だ。こうやって先の不安に押しつぶされそうな夜を過ごし、孤独を感じ必死に足掻く人間など腐る程居る筈なのに。何故這いあがれないのだろう・・・そして私は、何だ、何なんだ。そう自問しながら、今日も眠るのだ。

第1章 Usual spot - 1 (後書き)

第1章 Usual spotは主に主人公の女性の心の葛藤を書かせて頂きました。

少し重たい章になっておりますが、ここからストーリーが繋がって行くかと思うと、今からドキドキしています。それでは、楽しんで頂けるように日々精進致します。宜しくお願い致します。

第1章 Usual spot - 2

「今でなくてはいけませんか？」

私は声のトーンを落とすし、眼前の上司を挑発しないように静かに問うた。しかしそんな気遣いは全て無駄に終わり、耳障りな声が響く。オフィスが広いせいもあり、声は全体に響き渡っている。その状況に、内心深い溜息を吐いた。

「当然だろう！！ 人を育てるのに、時期なんて関係ないと思うが？ 優秀な！ 優秀な人材にチャンスを与えるのは、会社の義務だ！！」

入社して数カ月ばかりの新人に、大きなプロジェクトを任せようという話だ。必要以上の怒涛に、思わず皆が振り返る。その視線を背中に感じながら、更に声のトーンを落とすしながら、

「はい。しかしプレッシャーで入社出来なくなった社員も多数出ておりますし、出来れば後数カ月お待ち頂けたら、業務の内容も理解出来てよいと思えますが・・・。」

そこまで広くないフロアの中で、眼前の上司はテンションを上げるかの様に更に声を張り上げた。怒涛に近い罵声に、ある者は苦笑いをし、ある者は溜息交じりに外に出て、ある者は面白おかしく傍観している。

「はあ〜？ 君に聞いているのは、ただの確認なんだがねえ。彼らが持っている仕事を君が出来るかどうかをだ」

興奮している上司の声は、フロア全体に響き渡り、背中に感じる周囲の雰囲気は最悪だった。誰もが息を殺し、事の成り行きを見守っている。そんな皆の息遣いが聞こえてきそうで、嫌気がさす。会社がどう私を判断しているのか？ そんな事を、こんな場面で何故曝け出されなければならないのか。

『だったら初めからそう問えばいいのに・・・』

「私に、彼らの仕事を担当すると・・・というお話でしょうか？」

慣れている。こんなことは。今まで何度繰り返されてきたのだから。部内で新人の仕事だと認識されている仕事であつても・・・だ。本来ならば黙つて受けるべきだろう。

『でも、一体いつまで??』

そんな心の葛藤を、見透かしたように口元を緩めながら、上司は言葉が続けた。

「そうだ。この部署に暇なのは君だけだろう?」

何がそんなに嬉しいのだろう・・・緩む口元を手で隠しながら、舐めるような眼で見上げてくる。

もつと業務的に伝えてくれたら、こんなに心が揺らされる事も無いのに。上司はおもむろにデスクから、耳かきを取り出し、耳の穴を掃除し始めた。もうこれ以上話す気も無いのだろう。更に左手でパソコンのキーボード打ち付けている。

「・・・そうですか。・・・今担当している業務の事もありません。少しお時間を頂いても宜しいでしょうか?」

そう、伝えるだけで精いっぱいだった。パチーン、パチーンと弾くキーボードの音がイヤに耳に付く。恐らく今起きた状況を誰かに報告するのだろう。この上司は、そうやって自分の地位を確立してきた。社内では有名な話で、一人をターゲット絞り、徹底的に追い込む。その対象は必ず女性社員で、女性社員の離職率を上げたい会社の思惑だという声も噂される位だった。

席に戻った私は、パソコンを目の前にして、ゆっくりと息を吐いた。数年前から槍玉にあがった私は、それでも会社に留まっている。四十近い女の転職がどれ程悲惨か分かっているつもりだ。それに・・・と呟く。

『私の誇りなんだ。今の仕事は』

そう何度も心の中で呟いて、伝票に手を掛けた。

「はぁ・・・」

その日の夜、行きつけのBARで、止まらない溜息に友人を付き合わせていた。同じ会社で働く女性、沙織だ。営業の前線で戦っている沙織は強くて明るく、会社で一目置かれている存在だった。経理に所属しているとはいえ、全てがシステム化されている現在では、営業の彼女とは接点が無い。しかしプレゼン資料の経費の件で私は、

「ねえ、一度飲みに行かない？」

そう声を掛けられた。端正な顔立ちの沙織から、嬉しそうにジツと見つめられた私は、不毛にもドキドキした位だ。

「え？」

事務的に業務を伝えていた時に受けた突然の誘いに、正直面喰った。会社の女性社員達は、プライベートを重視する傾向がある。企画された飲み会にこそ参加するが、プライベートで飲みに行くなんて、ここ数年無かった事だ。しかし誘いに乗ってみると、評判通りの女性だった。常に前向きでサバサバしていて・・・いつの日か心を許せる唯一の友人になっていた。上司から不当な扱いを受けた日は、どこからか聞き付け、「飲もうよ！」と誘ってくれる。それが単純に嬉しい。

「本当にどうしたいのかしらね、女を」

沙織はそう言うと、グラスのウイスキーに口を付けた。コハク色のグラスの中に、アイスボールが光を反射してキラリと光る。彼女のセリフは、何も私だけへの励ましではない。二年前に結婚した彼女は、大きなプロジェクトをあっさりと外された経験を持つ。営業でトップ三の結果を出し続ける、彼女に対する会社の期待は大きかった。女子社員の間では、結婚が過小評価の対象にならないのではないのか？女性蔑視の傾向が強い、会社の転換材料になるのではと、ひ

そかに期待されていた。

しかし会社は、沙織をマネージャーから一般社員に降格させた。会社の言い分はこうだ。

「君には期待していたんだがねえ。結婚した以上、子供が出来る事を想定すると、会社はリスクを負った訳だ。そこを理解してほしいね」

沙織は、ロックグラスをカタリと傾け、

「大体、あの人にそんな権限あるの？ 部長に相談しなよ。絶対私的な意見だつて。毎日仕事もせずにインターネットをしているよ。うな奴よ。真に受けない方が良いつて！ もしあの男の行動が会社の命だったとしても、屈する必要はないからね」

人の陰口を言わない彼女にしては、珍しい発言をする。勿論、私を氣遣う優しいさだった。今は沙織の優しさにどつぷりと甘えてしまう。

「会社は私をどうしたいのかな？ 勿論仕事は一生懸命やるよ。お金貰っているし。でもあんな言われ方をしなければいけない程、駄目なの？ 私。もうどうやってても、駄目の様な気がする。」

・・・駄目だなあ、今は愚痴だね。・・・うん、沙織の言う通り、仕事を頑張つていけばいいよね。今の仕事、結構責任があつて遣り甲斐を感じているんだ」

心配そうに顔を向ける沙織にハッと気づき、気を取り直して笑った。私の言葉に、少し安心した表情を浮かべながら、

「全然！！ 聞くつもりで誘ったんだもん。溜め込んだらダメよ！ いったい話しな」

そう笑いながら、彼女はゆっくりと言葉を繋いだ。

「でも、ね。多分私、敢えて今のポジションを選択したの。会社の歯車として、頑張る事に限界を感じていたし・・・ね」
そんな選択もあるよと、ヤンワリと言つてくれている。

「そうだね・・・」

自分に聞きたい・・・私は、どうしたいの？ 一生働くことに不安が

ないと言えば嘘になるだろう。でも結婚の予定はないし、繰り返される生活に、劇的な転換期なんて訪れる筈もない。

『だから働いているの？ ううん、そうじゃない。生活の他に大事なものが仕事にはある』

・・・私の存在価値というのだろうか。しかし、今ではその価値ですら見失いそうになる。昔は母がそんな存在だった。それが幸せだったのに。一体どうしてこんな事になってしまったのだろうか。こんな出口のない、問答を一体いつまで繰り返すのだろうか？

そう思うと気持ちが沈むのだが、沙織に心配かけたくない一心で、沙織の言葉に微笑みを返す。目の前の優しい友は、こんなにも親身に心配してくれる。沙織が居るから、あんな会社でも頑張っているのだ・・・そう思うと、グラスを一気に飲み干した。

「昔はもつと飲めたのに・・・ごめん」

「何言ってるの！ 今日付き合ってくれただけで、助かったよ。本当に楽しかった。スッキリしたしね！！」

旦那さんに宜しく伝えてね」

「ううん、私も一緒に飲みたかったし。また行こうね」

そう言っただけで彼女は、彼女を待つ家族の元へ帰って行くのだ。彼女の後姿を駅で見守りながら、改札に定期を翳した。沢山の人が帰宅を急ぎ、私を何人も追い越して行く。帰宅時の電車の中は、平日の遅い時間だというのに結構混んでいた。ふと窓に映った自分の顔を見ながら思う。

『歳・・・取ったな（疲れ皺が醜く感じて、思わず目を背けた）

・・・最近、愚痴っぽくて嫌になる。沙織不快な想いをしていないかな・・・』

この電車みたいに、私の人生の行き着く先が分かっているならば、こんなに不安に成る事もないのに・・・そんな下らない事を考える自分に嫌悪する。考えてどうするのだ。良い事なんて起こる筈もないのに。

一人の部屋に帰った私は、おもむろにテレビのチャンネルを入れた。何をやる気力も起きない。ソファにしな垂れながら、脱力感にバタリと横になった。テレビからは、自己啓発に勤しむ若者達の特集が組まれている。専門学校を卒業した私は、直ぐに今の会社に就職した。今では大学卒しか取らない会社だが、当時はバブルも後半という事もあり、何とか滑り込む事が出来たのだ。それから、正にコツコツとただひたすらに仕事をしてきた。仲間達が退職していく中で、私はひたすら働いてきた。仕事のスキルを上げる為に、様々な資格も取得した。しかしそれが何になっっているのだろう。テレビに映る未来ある姿が忍びなくなり、早々にベッドに横たわった。今ではリストラの対象になりつつあり、上司の嫌味に付き合わされる日々。

『二十年近く・・・何だったんだろう・・・』

こんな夜は何度なく過ごしてきたのに、今日の出来事は私の心を無性にかき乱す。そう・・・こんな夜は困る。この虚無感に結論が出ず、抜け出せないループが辛い。私は深い溜息を吐いた。

・・・寝よう。いつか変わる。変わらなくても、私の考えがいつか変わるだろう。私の世の中に対する矛盾が矛盾でなくなる日が来るから。そう、思いながら目を閉じた。

「やだあ。ホントに無理。暗あーい！」

クスクスと笑う声が、すぐ耳元で聞こえたような気がして、背中がゾクリと冷えた。

『今、何か聞こえなかった？ まさか・・・』

私は一人暮らした。しかもここは、マンションの一室・・・現実的にこの声はあり得ない。思わず息が止まる。

・・・気のせい？ そう思うのに、体がピクリとも動かせない。

少しでも動いてしまったら、何かが終わってしまいそうな気がした。横を向いたまま自分の心臓の高鳴りがやけに耳に付く。一瞬、静寂が広がり、暗闇だけが周辺に広がる。

・・・何も聞こえてこない、あるのは暗闇が故の静寂だけ。最近ネガティブな発想に陥りやすいせいかな、幻聴まで聞こえる様になってしまったのだろうか。

「はあ！」

息を止めていた事すら忘れていた。

「大丈夫？ 私」

そんな自分に、思わず一人言を呟いた。そう言えば聞いた事がある。配管などを通して、周辺の部屋の音が響く事があるって。

「ふう」

やっと、呪縛から解き放たれたように、体を捻り天井を見上げた瞬間・・・淡く光る何かが目の前にいた。いや、浮いていたのだ。

「え・・・ちよ・・・」

この世界に不思議があるとすれば、こういうことかもしれない。光を発しているくせに、闇に対して照らす影響力は無いかのようには、その場所だけが淡い光で包まれている。こんな時に何だが、幻想的で美しい・・・そんな事を思ったりもする。

どれ位の時間が過ぎただろう。

『・・・もしかしたら、光の屈折？』

そう思える程の長い時間が過ぎ、この奇妙な現象に、恐怖が遠のく錯覚に陥り始めていた。だからだろうか、思わず、そう思わず手を伸ばしてしまった。あともう少しで、その淡い光に触れようとした瞬間、

「馬鹿なの？」

何の高揚もない、台詞のような言葉が、耳に届いた。

「ねえ・・・危機感ないの？」

相変わらず、球体は淡い光のままだったが、言葉を発する物体に言

葉を無くす。・・・とうとう、私おかしくなってしまうたのだろうか？会社はどうしよう。友人は悲しむだろうか？生活出来なくなっちゃうな。あーきつと誰かに迷惑をかけてしまう。こんな状況下で、漠然と考えながら、私はその光を見つめていた。

「危機感無い人間で怖いわね。今貴方は、この世界では考えられない状況に立たされている筈だけど・・・よく不用意に触ろうなんて気になるわね？ 何に対してもそう？」

幻聴まで・・・それにしても、これは私の中の声なのだろうか。だとすると、随分と容赦がない。

「そう・・・かもね」

その光は明らかに失望しているかのような声を上げた。あまりに流暢に会話が続くものだから、会話をする事に違和感が無くなっていく。

「貴方に言いたいのは、自分のルールが世界の常識って思っていないかって事よ。私のルールから言えば、未知数の物体に自ら触れる行為は自殺行為だと思っし、貴方がどっぷりと浸かっている絶望も、貴方だけのルールによって作られているっていうか、がんじがらめに縛られているように感じるけど？」

そもそも、未知数の物体に安易に触れる行為が、この世界の常識だというのなら、私がおかしい事になるけどね」

この物体の言葉は、至極当然だった。通常であれば、恐怖が先に立って触ろうなんて気にもしないだろう。お酒が入っているせいなのかかもしれないが、危機感が無いと言われれば、その通りだ。しかし今は恐怖よりもこの物体の発する言葉に、気持ちが悪く反応してしまう。

「私が今の状況を作り出しているって？」

「そうよ。状況はどうにでもなるのに、周りが変わる事に期待するが故に生まれてくる、絶・望ってやつね」

グツと手に力がこもり、体全体にじんわり嫌な汗を掻く。こんなお決まりのセリフに、いちいち熱くなってどうするのだ。どんな窮地

に追い込まれようとも、何度も自身をコントロールしてきた。そう思いながらも、今日の理不尽さを思い出すと、感情が先に立つ。

「っ……！ 私は、私のルールでこんな状態になっているわけじゃ、ない！ 確かに全て私を選んできたわけだけど、世の中には不可抗力で、どうにもならない事があるの！ 嫌なら辞めることも選択肢の一つだなんて、他人だから言える言葉よ！ 生きていかなきゃいけないのに……。私は、私の限られた資源の中で出来ることをやっているだけよ！」

激しく高鳴る心臓が、今にも爆発しそうだ。

第1章 Usual spot - 5

光は、くっくつと笑いながら、上下に震え、そして・・・、

「ぷっ！ あーははは。それって自分の中で使いならされた言葉？ そうやって自分に言い訳しながら生きてきたの？ もう！ ヤダ

」
「・・・は？」

笑いを堪える必要がないと言わんばかりの態度に、この夢が妄想から一刻も早く覚めたかった。何故どうにもならない現状を、否定されなければならぬのか。この声が自分自身としても、息をするのも苦しくなる程悔しくて仕方がない。可笑しくて仕方がないと言わんばかりに、光の玉は未だに上下に震えている様子を見て、屈辱から布団を頭から被った。

・・・寝よう。病気のこと、明日考えよう。明日の朝、このままだったら病院に行こう。これからの事も、明日ちゃんと考えよう。全ては明日だ。

「・・・」
部屋に静寂が訪れ、自分の息遣いしか聞こえてこない。布団の中で、少し息苦しさを感じながら、どうかこのまま寝てしまいたい。このまま光が消え失せて、私をかき乱す余計な事を言わないように、ただただ祈っていた。そんな私の願いも虚しく、

「ねえ・・・」

自分の心の声なのか、光は執拗に話し掛けてくる。

「この状態を無視して、寝てリセット出来るなんて思っている時点でおかしいでしょ？」

『違う！！ これは夢だから！！！！』

微動だにしない私に向かって、淡々と言葉を繋ぐ光に、ジワリと嫌な汗をかく。こんな非現実をどう受け入れればいいのだろう。先

程の怒りの感情は通り過ぎ、今は明日から直面するであろう現実
に、考えがまとまらない。

「・・・ふう。幻像でも、夢でもないわよ。私は」
布団をはぐ事も出来ず、それでも光の発する一言一句を逃さぬよう
に、全神経が言葉を追うのだ。一体、何がどうしてしまったのだ。

「大体、皆自分がおかしくなったか、夢かかって思うのよねえ。確
かにこの世界では現実的ではないかもしれないけど、全く他の発想
は出来ないものかしら？ 自分達の世界が全てだと思っている、人
間らしいと言えば人間らしいのかしらねー」

布団を上げる事も出来ずに、布団の中の暗闇を凝視し続ける。

『・・・やばい・・・。本気でやばい。現実逃避もここまで来る
と、救い様が無いんじゃない？』

これって日常生活が出来るレベルなのかな。どっちにしても、人に
迷惑は掛けない様に・・・しなきゃ
頼れる親戚なんて、知り合いなんていない。明日までこの状態が続
くようであれば、正気の内に対策を取らなければ、真剣にそんな事
を考えていた。

布団に包まっただまま、反応しない私にお構いなく光は語り続ける。
私に言い聞かせる訳ではないのかもしれない。まるで独り言のよう
に、ブツブツと呟いているのだ。

「そもそも、この生きにくい世界に固執して生き続ける理由は
なに？ 生きとし生ける者が、純粹に生きている事が、自然の摂理
ではないの？ 何故どう生きているのか？ が、重要になるのか理
解出来ない。

考える事を与えられた人間の悲しいサガ？ 生きている事が一番重
要ではないの？ その理由すら追及せずに・・・一生自分は幸せ
ではないと考え続けるの？」

光の問いかけに、ガバツと布団を剥ぐ。きちんと終わらせなけれ
ば、きつと朝までこの状態だ。明日は仕事だというのに、「冗談じゃ

ない。一睡もせずに仕事をするなんて、今の私には考えられないのだから・・・こんな状態に陥っても、明日の仕事の事が気になってしまう。根っからの仕事人間だと思つと苦笑いだ。私は光と対面し、私は無意識に大きな息を吐いた。

「私に、何が言いたいのか？」

（続く）

第1章 Usual spot - 6

光は相変わらず、鈍く光り続けている。

「提案があるの。貴方にとっては現実的ではない話をするけど」
先程までの軽口が一切消え去り、急に声のトーンを落とし話し始めた。光から語られる内容は、夢の様な話で、現実離れた内容に、やはり夢なのか・・・そう感じざるを得ない。光の声だけが響く空間は、光と私だけが存在して居るかの様な錯覚を覚える。

いやにゆつくりと誘うその声は、底に沈んで行くようだった。地の底から響く様な、優しい母の声のような、逆らえない父の怒鳴り声のような、何とも表現する事が難しい。今まで聞いた事がない、音に堕ちて行く様で、足元が覚束ないように落ち着かない。

「短的に言うけど、この世界を捨てて、貴方の経験を活かせる世界に行ってみない？」

「・・・転職のお誘いな訳？」

敢えて言ってみたが、言葉にした事を後悔する程の冷やかさに、グツと言葉に詰まる。

「・・・生きていく場所を、ちょっとそこまで変えてなんて話ではないわね。」

この世界、貴方が生きているという現実を捨てて・・・そうね、この世界で一度死んで、私が生きている世界に来てほしいって言うたら、分かる？」

光が発した「死ぬ」という言葉だけが、やけに現実的に感じて背中がゾクリと冷えた。状況的に簡単な話ではないと思っていたが、夢にしても妄想にしても「死ぬ」などと聞くと、ゾツとしない。

「え？死ぬ？えっ？何故？？もしかして、やっぱりやばい状態？何なの？いきなり死ぬなんて」

沢山の疑問が浮かんでは消える。緊張と恐怖のあまり、少し声が上

ずっているかもしれないが、何とか声を絞り出し問うた。

「・・・死ぬのは困るよ、勿論」

「何故？」

何故困るのか、本当に理解出来ないと言わんばかりだ。いや、何故分からないのか理解出来ない。「何故？」この言葉に迷いからではなく、あまりにも常識的な問いに、直ぐに答える事が出来ずにいた私の戸惑いなど何の障害にもならないと言う様に、爆弾発言を放った後でも変わらない声は、淡々と言葉を繋ぐ。

「あゝこの世界では死ぬって言う事よ。死ぬといっても、別の場所生きていくの。」

そもそも、今でも何故生きているのか分からないのでしょうか？ 貴方はこんなに頑張っているのに。誰も貴方の価値に気付いていないという事は、ここに貴方の場所は、ここではないのではないかしら。恐らく、どれだけ時間を経過したとしても、貴方が置かれた状況は変わらない。いいえ？ 年を重ねていく分、もっと生きていくことが辛くなるわね。だって、周りが貴方の価値を分かっているんだもの？

辛いわよ。年を取った後に、後悔しても遅いのよ。断言出来るわ、貴方は、何度でも絶望を、繰り返す」

いや、死んで別の場所って・・・行ってどうする！！ そう突っ込みを入れてはみるが、光の言葉に思わずゴクリと息を飲んだ。今の状態よりも悪くなっている・・・将来の私。あまりにもハッキリ断言するものだから、予言の様に脳内に響く。

「・・・そんなこと、分からないでしょ・・・？」

・・・フッフ

まだ分からないの？ そう言わんばかりに、光は侮蔑した失笑を発する。

「分かるわ。貴方は、数年前も同じ悩みを抱えていたわ。ただ今と違うのは、まだ将来に対して希望を持っていた事。多少若かったから。何事も経験だと思っていたのではなかったかしら。ま、仕事

だけではなく全てに、おいてね。

ほら、現に現状は悪くなっているじゃない？ 何にも変わっていないわ」

光は、一切私への気遣いを排除し、一方的に捲し立てた。そして「現状は悪化している」と言い放った後、一時の静寂が訪れた。私の思考は、今や目まぐるしく動きまくり、心臓は痛い位に高鳴り、息をするのも苦しい。断る言葉が即答出来ないのは、光が発した先ほどの言葉によって、押さえつけられているからだ。

『・・・そうだったな』

認めたくない、そう頭では強がってみても、心は激しく動揺していた。確かにそうなのだ。少し状況は変わっているが、今と差ほど変化がない悩みを抱えていた。変わりたくても、変われない自分。

自分の現状は・・・悪くなる一方だということに。

「変わりたくないの??」

そんな言葉に、グツと体に力がこもる。この光は、私の思考が読めるのではないか? 冷静になろうとする私の心を、ピンポイントで掻き乱す。

「・・・変わる?」

思わず光が発する言葉を、復唱してしまう自分が悲しい。何故、聞いてしまうのか? この異様さは明らかなのに。私の反応に感觸を得たのか、高揚したような口調に変化しつつある。

「ええ。それは勿論保障するわ! 私の世界は、一〇〇%実力世界だもの。この矛盾した世の中よりも、随分シンプルよ。

貴方達は、私の世界でいう英雄なの。世界の民は、貴方達をエンダと慕い、尊敬し、崇めている。こんなちっぽけな世界での貴方の絶望なんて、取るに足らないものよ」

「具体的に何を?」

光は私の言葉に強い感觸を示し、興奮して居る様に見えて、私の心が警鐘を鳴らした。「危険だ」と。この状況下で興奮している自分がいる事否定出来ない、と同時に冷静に分析をしようと躍起になっている事も事実だった。

「・・・。私の世界の民を救ってほしいの」

その光は、つい前までの饒舌が嘘かのように、随分と言葉を選択しながら話を進め始めた。

「今、私の世界は、今にも滅んでしまいそうな程、危機に瀕しているわ。罪もない、弱者が苦しんでいる。この状況を打破する事ができる救世主を、世界の民は探している。

・・・貴方だったら出来ると思ったの。だから、タブーを犯してこの世界にやって来た」

光の言葉は、私の心を熱くする。私だからこそ出来る何かがある

らしい。しかし、その症状を恥じながら、私は冷静に、冷静に自分の心を諫める。

「あのね……。私に何が出来るの？ 私には特別な力も、人並み以上の腕力も、知性もないわよ。もつと言えば、もう四〇歳も近いおばさんなの。この世の中には、もつと貴方が望む能力を持った相応しい人がいると思うけど？」

・・・そう、私に何が出来るのだ。この世の中さえもままならないというのに。言葉にしてみても改めて思う。こんな私に何が出来るというのだ。しかも「死んで」行くという。そんな事は出来ない。ここまで考えて、自分の発想に可笑しくなった。

『これは夢なのに。若しくは、私の現実逃避なのに、真面目に・・・馬鹿みたい』

私が、こう答えるのを待っていたかの様に、光は間髪入れずに答えた。夢だと思いつつも、夢にしてはリアルな展開に、心の中でブツツと分析を続ける。どうしても私でなければならぬ理由が見つからないのだ。

「この世界の常識なんて、何一つ関係ない！ 年齢も、能力も、何もかも超越して人間の資質だけで戦える世界なの」
更に強い口調でその光はこう言い放った。

「だからこそ、私は貴方を選んだ。人として、常識のある貴方に託してみたいの！ だってそれが、私達の世界にとって絶対無二の強さになるから」

分かってる。分かってるのだ。この光は、私の一番弱い部分を見越して言っている事位。こう伝えれば私が反応する事を見越している。目的は分かったものじゃない。それに、それは人として正しいのか？・・・そう思っているのに、何かが変わる・・・そう考える自分がある。

・・・それでも、私の中の声が、本当にそれでいいの？ そう問うのだ。

この世界を中途半端に逃げ出して、次の世界で上手く生きていける筈が無い、と。

「死んで生まれ変わりたいと思えるほど、自分が不幸だとも思えない。悪いけど、他をあたって」

馬鹿な私・・・この世界から逃げ出してどうするの。仕事だって、私だから出来ている事があるはずよ。こんな事、絶対あっちゃいけないよ。いくら夢だとしても、そんな事に希望を持つっちゃ駄目だ。そう、今までの人生や友達全てを投げ出していい筈なんて、ない。・・・これが私の妄想でなければの話だ。

少しの沈黙後、光は怒りを爆発させる訳でもなく、抑揚のない声で呟く。

「ふ・・・ん、そう？ また、来るわ」

光がそう告げた瞬間、部屋の中は漆黒の闇が広がり、そこには隣の住民のテレビの音だけが、低く響いていた。

第2章 The selection - 1

パソコンにデータを打ち込みながら、昨日の夜の事を思い返していた。気もそぞろになり、何度もバックスペースキーを押す。

『夢・・・』

いや、夢にしてはリアルで生々しい。何度も「変な夢を見た」と思おうとしても、光の一言ひとことが、頭から拭う事が出来ずにいる。こんなに鮮明に覚えているなんて、未だ嘗て体験した事がなかった。でも・・・と思う。

【自分の世界を救って欲しい】

そんな本やゲームの中の話・・・正気の沙汰ではない。本気で病んでしまったのかと思うのだが、目が覚めたら全てがいつも通りだった。しかし、病気の人間は一樣にそう思うのではないだろうか？

『・・・どうしよう、病院に行くべき？』

「はあー」

無意識に溜息を吐いた。周りの雑踏が、遠い場所から聞こえてくるような感覚に陥る。気が重い。気持ちだけがやけに高揚して、反動でとても疲れた感じに良く似ている。朝からずっとこの思考のループに陥っていた。

『今すぐ帰りたい・・・』

目頭を押さえながら、けだるくパソコンに目を向ける。先程からちっとも仕事が進んでいない。積み重ねた書類に目を向けて、溜息混じりに手を伸ばしたその時、右下から社内メールが浮かんだ。

【お疲れ様】

『え、沙織？』

今日は朝から外回りだと言っていたのに、社内に居る事に驚いた。

【おはよう。朝見かけたら、何だか疲れているかなって感じだよ。大丈夫？ 昨日飲みすぎちゃった？】

彼女の優しさが、文面から滲み出ていて、いつもより何倍も嬉しかった。気にかけてくれる人がいる。それが、有り難くそして嬉しい。『それなのに、自分の中の声なんか心乱されて馬鹿だ、私。私ってば・・・単に寂しかっただけなんじゃない？』
そう思うと恥ずかしさに顔が熱くなる。

【昨日はお疲れ様。 実は昨日、変な体験をして】
いけない。本当におかしくなっちゃって思われちゃう。一気にデリートキーで削除をしながら、何とか無難な文章を打ち込んでみる。

【昨日はお疲れ様。 あれ、外回りは？】
愚痴が多くなっちゃってしまっただけ。 楽しかったね。 聞いてくれてありがとう！ すっきりしちゃった。

疲れてる？ そんな事ないよ。 でも、昨日少し飲みすぎちゃったのかな？ 夢見が悪くて（<|>） でも、大丈夫。

【気にかけてくれてありがとう！】
・・・送信、と。 夢見が悪いという事にした。 私、大丈夫だよ。

「ふー」と一息ついた時、彼女からのメールが浮かび上がってきた。返信が早い！ 夢見が悪いなんて書いたから、心配してくれているのだろう。 心配させた事を詫びながらも、心穏やかにメールに目を移す。

【外回りだったんだけど、急遽予定変更になったの。

ふふふ。 その夢見の話聞きたいな。一緒にランチしようよ！】
沙織の存在は、自分は孤独じゃないと気づかせてくれる。今日の朝、普通に目覚めて良かった・・・仕事に来る事が出来て良かった。そして、そう思えて良かった。腕時計に目をやると、後二時間足らずでランチの時間だ。 つい先程まで、中々手が出なかった書類の束に手を掛けた。

『二時間あったら終わるわね。 よし、ランチを楽しめるように、頑張って終わらせちゃお！』

最近忙しかったから、少し疲れていたのかもね』
『そう思うと、心なしかキーボードを弾く指先が、軽くなるのを感じた。』

第2章 The selection - 2

沙織の言葉に、微笑みを堪えながら、ランチの了承メールを飛ばした。

『あはは。大した夢じゃないつて。でも、ありがとう！ じゃ、パスタ行く？ ほら、この前行った（＾・＾） じゃお昼にね』
送信、と。思わずニンマリ口元が緩む。

「あら、何だかご機嫌ですねぇ」
同じフロアの後輩が声を掛けてきた。

「え？ そう？」
データを打ち込む手を止めて、上司からの視線を阻むように背を向け対応する。こんな場面を良く思う上司ではないからだ。少しでも長く話そうものなら「給料泥棒かね。就業時間中は、集中してほしいものだがね。」なんていう声が飛んでくる。当たり前前の注意だと思っているが、今日はこれ以上の気遣いは出来ない、そう考えての対応策だった。

「忙しいけど、もうすぐこの仕事が終わるそうだからかな」
そう答えながら、朝のセットにどの位の時間を要しているのか想像も出来ない、完璧な風貌に少し見とれながら笑った。

「そうなんですかあ〜？」
後輩は大きな瞳を更に大きくしながら、髪をクルクルと指で回しソツと耳打ちをする。

「昨日の・・・あれ。気にしない方がいいですよ。あの粘着質つて、もう病気ですから、ね？ みんな言っていますよ。嫌がらせだつて」

この会社の女性社員だからこそ、分かる暗黙の空気が流れる。私は、小刻みに頷いた。

「じゃあ〜」

そう言いながら、後輩は屈託のない笑顔で微笑み、その場を後にし

た。彼女の言葉は、私に対する嫌みではない。

これが会社の現状だ。この会社の女性社員は、希望をもって入社した時から、長い年月を掛けて、少しずつ仕事を諦め、この会社に期待する事を止める。先程声を掛けてきた後輩も、入社当時は会社の在り方に随分と会社に警鐘を鳴らし、戦っていた一人だった。しかし、

「これ以上会社の方針に納得できないのであれば、部署移動も・
」

そんな会社の声に、女性社員は落胆し諦める。だから、それぞれが方向修正を行っていくのだ。ある者はプライベートに。ある者は結婚に。ある者は外の世界へ可能性を求めて、会社を辞めていく。女性蔑視だと叫ぶ前にやる事があるのでは？と思う時期もあった。しかし、会社全体に根付いた覆らない現状に、皆の思考は止まるのだ。私は、どこにも行けなかった。社会人として与えられた仕事、そしてそれ以上の可能性を信じて、疑問を繰り返しながら、方向転換が出来ずここまで来たのだ。

これ以上考えてはいけない。ここで、私は思考を止めた。

「で？ どんな夢だったのよ？」

ゴルゴンゾーラのパスタを口に運んでいた私に、沙織は嬉しそうに聞いてきた。

会社の近くの洋食店で、既に店内は一杯だ。私たちは十二時丁度にダッシュをして、何とか席を確保出来た。必死に走ったものだから、到着した時には息切れがひどく二人で笑った。スパゲティはとても美味しく、沙織との会話は楽しくて、朝の憂鬱な気持ちを、あつという間に払拭してくれる。

「何でそんな嬉しそうなのよ？」

私は話したい衝動を何とか抑え、ニヤニヤ笑う沙織に問う。

「だって、夢見が悪いって言っている割にすっきりした顔をしているじゃない？ 実は素敵な夢だったのかしら？ って思ってるね。」

ねえ？ ホントに夢の話？？」

もぐもぐと口を動かしながら、それは貴方の気遣いが嬉しいからなの……そう暖かい気持ちになって自然と笑みが零れる。

沙織の言葉に背中を押された気持ちに成り、

「昨日の今日でそんな事、ある訳ないじゃない！」

うーん、あのね……笑うよ。絶対。人の夢を聞いたがるなんて、変な人〜」

まだ話してもいないのに、嬉しそうに笑う沙織を見ながら、絶対笑われると確信した。私はかなり用心深く、内容をかなりオブラートに包んで、あたかも夢だったかのように（実際夢だったと思うのだが）昨日の夜の事を話した。

「で？ その光から自分の世界を救ってくれって言われたって？」私の言葉を復唱しながら、沙織はポカンと私を見ている。私は波立つ心臓を必死に隠しながら、とぼけた顔で彼女を見る。

「ねえ？ 変な夢でしょ？？ 何だか可笑しくなっちゃって」

沙織は、止まっていた手を思い出した様に動かしながら、スパゲティをパクリと一口頬張った。モグモグする口を押さえながら、今にも吹き出しそうな顔をしている。

「ん、もう！ 何の願望よ？ 勇者に成っちゃうの？」

二人、「無いつて！ そもそも成れないつて！ て言うか、無理だから！ あはは！」と噴き出した。

「なーんだ。何とも思っていないかった人が夢に出てきて、好きつてことに気付いたの……なーんていう甘〜い展開を期待していたのにい。ツマンナイ！」

沙織の想像力の豊かさに、思わず笑いが出てしまう。

「言っただじゃん、変な夢だつて。そもそも、一体なんの妄想よ。さすがに、それはないんじゃない？」

完全否定する私の言葉に、

「分からないじゃない？ 駄目よ〜自分から否定したら、夢にも出ないからね」

そう言いながら、沙織は少しプツと頬を膨らませ、悪戯げに笑った。私は、そんな彼女を見て、ホッと体の力が抜けた。

『なーんだ、やっぱり夢だったんだ』

いつもの日常に、自然とそう思えた。そうか、そういう風に笑い飛ばしてほしかったのか……。

「午後は？ 外出なの？」

「うーん。そうだねえ。予定はあつたけど、今日は会社にいる予定。事務処理が溜まってて。いい加減マネージャーから怒られそう」

食後のコーヒーを飲みながら、ふうと彼女は溜息を吐く。私はお昼が終了する二十分前の時間が好きだった。明るいつ午後の光と他愛無い会話が、どうしてこんなに楽しいのだろう。

「ふーん。一日外出していると仕事が溜まって大変だねえ」

「いえいえ、一日パソコンと向き合っている方が無理ですから！」

「だ〜から、事務処理溜まるんでしょ??」

「違うくない！」

店を出る頃には、朝とは打って変わって、晴れ晴れとした歩みで部署に向かった。

第2章 The selection - 3

昼食から戻った私は、先程までの幸せな気持ちと相反した状況に追い込まれていた。

「少し時間、いいかね？」

上司がさも愉快だと言わんばかりに、ニタニタと笑いながら肩を叩いて来たのだ。いつもであれば、長々と自席で小言を言うタイプなのに、あえて会議室を指定してきた時、嫌な予感が過った。

広い会議室に二人が向かい合って座ると、圧迫される空気に気持ちがあたふたする。そんな空気すらも楽しむ様に、上司は長い前置きを置きながら言葉を繋いだ。

「それでね。君に、会社からお願いがあつてねえ」

上司の猫なで声を聞いた瞬間、後頭部から背中にゾワツとした感覚が流れた。もったいぶりながら、あのねえ、でねえと繰り返している。

「庶務に欠員が出てねえ。ほら庶務って仕事は地味だけどさあ、やる事いっぱいあるじゃない？ だって、社員が働きやすい状況を作るのが仕事でしょ？」

「……あの、それで……？」

この後の展開は、聞かずとも分かる。上司の言葉を待つまでも無く、私の脳裏には様々な思いが駆け巡る。

『……庶務？でも、まさか？ 部に私がいなくなったら？ いなかったら？』

出世をする道はなくても、それは会社の方針だからと思っていた。私の存在は、認められていると、認められている筈だと思って頑張ってきたのだ。目の前の男は目を細めながら、嬉しそうに薄ら笑いを続けている。言葉を発せない私に向かって、トドメを刺す様に大きく身を乗り出す。

「ふう。だからねえ、長く経理で実績を積んでもらった君に、今度は庶務で活躍してほしいと思っっているのだよ」

「・・・その経験を活かす仕事が庶務課にあるとは思えない。いや、庶務の仕事がどうと言う訳ではない。会社に無駄な仕事はない。会社に所属している以上、異動は当然視野に入れておくべきだろう。会社は組織なのだから・・・そう思っているのに、思考は拒絶を続ける。」

「分かってている。分かっているけど！今の部署で頑張ってきた・・・それが唯一、この会社にいる理由だった。それだけを支えに、仕事に取り組んで来た。それだけが、私の誇りで。それだけが、私の希望で・・・」

（庶務課は、長年勤めてきた女性社員の、最後に行き着く場所と言われている場所だ。評価は厳しく、社内の不満の捌け口。会社がこの部署に辞令を出すときは、リストラ勧告と同じだといわれている部署。またの名を、「不要島」。忌み嫌われる部署だと言われている。ここに異動を命じられた社員は、それだけで退職を決意する程の部署だった。）

この会社に勤めてきて、初めてじわりと目頭が熱くなった。しかし寸で、その感情を押し殺す。この人の前で泣きたくない、その一心で何とかその一線を越えずに済んでいた。

「課長、私の・・・仕事は？」

「あー。君はもうその事は心配しなくていいよ。僕が見るから。大体さあ、君少し立場をわきまえて発言したまえよ。この前だって僕が分かっているような発言なんてして、僕の立場ないじゃない？まあったく！飛ばされても文句言えないよねえ。見ている人は見てるっていうかさあ。」

「だいたいさ〜長年勤めているからって、勘違いしてないかね？仕事は年数じゃないよね、どれだけ仕事に対して誠意と責任を持

ってやるかでしょう？ 自分の専売特許ですくみたいな顔してもらっても、会社として迷惑っていうか、そんな会社の迷惑、分かっている？ そんな・・・」

どこかの自己啓発の本を読みあげる様な言葉は、私の中に何一つ入って来なかった。

『この前の報復？ そんな理由で？』

「自分だけが、全体を把握しているなんて思っている訳？ そんな訳ないよねえ。マニュアルが徹底されているこのご時世に。誰でも出来るつての。あんな仕事。」

自分だけが特別ななんて思っただけで仕事されると迷惑だ」

私を飛ばす理由をずらずらと並べ、課長は捲くし立ててくる。ガラシとした会議室に、上司だけの声が響き、頭の中で木霊するような錯覚を覚える。

「おっしやられてる意味が、分かりません」

こうなると、手がつけれない。でも、言わずにいられない。勿論仕事で、彼の事を馬鹿にした態度を取ったつもりは無い。チームの事を思い、経験からくる助言だと思っていた。そんな風に思われてしまっていたのかと思うと、もう自分の全てが否定されたような気がして、自分がこの場に居る事自体が不思議でならなかった。

私の言葉がカンに障ったのか、フーフーと荒い息を吐きながら、こう上司は吐き捨てた。

「ていうか、も、明日からうちの課に来なくていいから。荷物まとめて、とつとと庶務に行つてよ」

この言葉に、今まで我慢してきた感情が、一気に沸点まで到達し、そして弾けた。何なのだ、この状況は。

「その言葉は、会社のご判断ですか？ 部長に確認させて頂いても宜しいのでしょうか！」

私の剣幕に、切り札と言わんばかりに、ニタリと笑う。

「ふう、当たり前だろ。会社からの辞令だよ。君に対するね。あ

くまで僕は、代弁者だけど？」
そう言い放った。

『え・・・？』

底の見えない地底へ、一気に突き落とされた・・・そう感じた。これが会社の判断だつて？ 意も言われぬ、虚無感が襲う。

何故？ 何故に、長年頑張ってきた私に？ ここまでの仕打ちって何なの？ 誰にでも出来る・・・そんなことは分かっている。

『ふ・・・リストラ対象者は、皆一様にそう思うか・・・』

突き付けられた現実に、何だかもう、どうでもよくなってきた。窓から差す午後の暖かい日差しですら、私の気持ちの慰めにもならない。廊下から聞こえる雑踏が、別の世界の音のように聞こえて来る。仕事も、会社も、この上司も、怒りも、悲しみも、どうでもいい。

さすがに、ジワリとくる感情を抑えきれなくなる。あーもう耐えられない。いつその事、辞めてしまおうか。考えていなかった訳ではない。今の生活は出来なくなるかもしれないが、今以上の屈辱があるだろうか？

今までの自分を思うと、可笑しいのか、悲しいのか、何故か全てが混じり合い、自虐的に少し笑った。

第2章 The selection - 4

その刹那、突如昨日の光が現れた。

「え」

あまりの衝撃で動けない私に、その光は気だるそうに単調な声で、合わせてこの状況が当たり前と言わんばかりに告げる。

「さあ、どうするの？ 昨日はあせって台無しにしちゃうと元も子もないから、一旦引き下がったけど、正直あんたに付いているのも飽きちゃった。何とか扉は開かれたし、もう強引にでも連れて行くわ」

「何故・・・ここに？」

光の先に居る上司に目を向けると、こんな状態にも関わらず、にやにやと締らない顔をしている。

「私・・・しか見えていないの？ やっぱ私がおかしく・・・」
絶望の淵に立たされる思いで、もう一度目を落した時、上司の異変に気付いた。確かに笑いながら座っているのだが、明らかに人間のそれらしくない。人間はこんな風に、不自然に存在する事が出来るのだらうか。

一瞬、突然の光の出現に、驚いて動作が止まっているのかと思っただが、全てが一瞬にして画像として切り取られたようだった。半開きの口、そして今では焦点が定まっていない目。正に蠅人形そのものだ。

「な・・・何？ 何が起きているの！」

あまりの非現実的な光景に、思わず叫ぶ。理解の範疇を超える状況に、ゴクリと息を飲んだ。

「何なのよ！ 私がおかしいの？ 何故私なのよ！」

「もう、本当に面倒くさい・・・この女」

私の叫びに、ブツブツと言葉を繋ぐ。

「あゝうざい。たく、こっちの人間は、何故にそう考えすぎるのかしら？ もう少し、シンプルにしてくれない？ 面倒だわ。それとも、自分の世界の常識以外を、受け入れるキャパが少なすぎるのかしら。」

「はあ・・・本当に理解不能。 あんたである理由は、昨日伝えたわ。ま、もっと言うと、子供だと死ぬ事を現実に捉えられなくて、すぐ死んじゃうって事かしら」

「光の玉は私の存在など、どうでもいいというかのように、独り言のように捲くし立てている。」

「ゲーム感覚だといいい結果を出すんだけどねえ。少し痛い思いしただけで、戦意喪失しちゃうし。自分の限界が図れなくて、力のコントロールにムラがあるし・・・。だから、簡単に生まれ変わる、元の世界に戻るなんて夢を見る。大人も同じようなものだけど、諦めも早いから。」

「物事の道理が分かる前から育てても良いのだけど、そんな時間も無いしね。じゃ〜どうしようかかって考えた時、大人に目を付けたって訳。人間って人生が半分を過ぎると、漠然と命は永遠ではない事を認識する様になるのよねえ。・・・それに、特にあんた、もうこの世界にいらぬ人間じゃない？ 通常は成功者が選ばれるけど、あんたに限っては、この理由しかないって」

「あ・・・の、どうするつもり？」

「全く！ 思った以上に時間が掛かったわ。最悪最低な状況に追い込まれても、何かしら活路を見出したりして・・・本当に、冗談じゃないわよ。本当に厄介な人間。」

「私だって、もっといい人材に当たりたいじゃない！」
「私の質問なんて耳に入っていないようだ。明らかに私に対する不満にゾクリと背筋が凍る。意味は理解出来ないが、昨日とは、全く異なる状況である事だけは明らかだった。こんな場所に突然出てきたのも、状況が切迫している様に感じる。」

『扉が開いたって何！？』

さすがにもう夢だとは、思えなくなってきた。何よりも、この状況は異常だ。

思わず後ずさりをした瞬間、光から鋭く何か伸びて手を掴んだ。「いやっ！」

そのまま今まで味わった事が無い程の力で、グツと吊るし上げられた。余りにも強い力のせいで、掴まれた手首から血の気が引き、思わず唸る。何とか振り解くべく、手を掴んでいるものに目を移した時、思わず目を疑った。

それは手だった。しかし、只の手では無い。私の手を掴んでいる手？・・・え、これは骨？

「言つたでしょ。あんたが生きている現実を捨ててって。あはは。」

あゝはははははは！！

光の感情は今や沸点に達したかのように、甲高い高笑い繰り返す。この異常な状況に、恐怖のあまり動く事も話す事も出来ない私に、その光はこう繋げる。

「死にたくなつた訳ではないみたいだど・・・でも、未練もないでしょ？」

そんな恐ろしい言葉と同時に、グイツと光に引き寄せられた。光だけで、他は何も見えない。見えない事が救いとすら思える。

「痛！！」

更に腕をねじ上げられ、骸骨の手は今や目の前まで迫っていた。もう、私の存在なんてさほど重要では無いと言わんばかりに、自身身に言い聞かせるように言葉を繋げる。

「もう、私は十分待ったわよね？ 多少強引でも、もう構わないわ。」

そもそも、貴方が良い理由なんて知らないわよ。私が聞きたい位だわ。

ネガティブでえ、力も無いくせに正義感だけが存在価値で？ 正

しい事をしていれば幸せになれるって思っている馬鹿な生き物。正に暗いったら。なのに、何の努力もしない上に、全てにおいて中途半端で。

今までスカウトしてきた中で、一番つまらない人種。それなのに、あんた、また頑張るつもりでいたでしょ？ 我慢出来なくなっただわ、いい加減。

何とか扉は開かれたし、あんたの意志なんて、どーでも良いの。強引にでも、連れて行く、わ！！」

掴まれた手に、更に力がこもる。

「私、本当にあんたが嫌い。あの世界で、さっさと、のたれ死になさい。」

悪意が籠る言葉と声に、体から汗がドツと噴出した。自分自身に何が起こっているのも理解出来ない。理解出来ないが、昨日とは打って変わって危険な状況である事は確かで、生まれて初めて「死」というものを、強く実感する状況に追い込まれている・・・それだけは理解出来た。

第2章 The selection 5

ギヤハハハ!!!

さも愉快だと言わんばかりに、光が笑う様に、目を背ける事が出来ず直視してしまう。死ぬ恐怖よりも何倍もこの光が怖い。更に締め上げられ血の気が引き、もう駄目だと意識が朦朧とした時だった。

バン!!

その刹那、会議室のドアが、勢いよく開かれた。驚いて振り返ると、颯爽と入ってきたのは、誰でも無い、沙織だった。

「沙織!?!」

知った顔に、思わず叫ぶ。いや、ここは会社だ。誰が会議室に入ってきてても、おかしくはない。しかし、こんな不可解な状況に、知った人間が現れる事に驚いた。使用中なのを知らなくて、入ってきたのだろうか。

「逃げて!」

私は、無我夢中で沙織に向かって叫んでいた。彼女をこんな狂った状況に、巻き込みたくない! 光の後ろに蠟人形のように存在している上司の様になつてしまつたら!

「何だかおかしいの! だから!」

それでも沙織は、何事も無いかのように、ゆっくりと近づいて・・・そう思つた瞬間、私と骸骨の手を振りほどいていた。その行動はあまりにも速く、一瞬何が起こつたのか、動く事が出来なかつた位だ。しかし一番驚いたのは、光の主だったかもしれない。一瞬沈黙が流れ、

「えつ? は? なに? あんたなんなの?」

動揺する声が響く。沙織に手を引かれるままに、今まさに私達がドアから抜けようとした時に、

「な! てめえ! 何者だぁー!!」

耳につく怒涛が、割れんばかりに響き渡った。その直後、空気を振らす衝撃が、私達の髪先を突き抜けた。揺れる髪に違和感を覚え、思わず振り返った先には・・・つい先程通り過ぎた場所が、音も無く挟られている光景が広がっている。それは正に一瞬にして、豆腐を押し潰したように、ただその空間だけがぼっかり壊れていたのだ。

「はっ・・・？」

言葉にならない。何が起きているのだ。一体、昨日から何が変わってしまったのだというのだろう。

「走れ！」

沙織の声に反応して、無意識に足が前に進んだ。沙織は私の手を引いて、中央のエレベーターを指し、廊下を駆け抜ける。毎日沢山の人が行き来する通路なのに、誰一人として会わない。扉の向こうに広がるはずのオフィスにも、人の気配を全く感じない。

何故私と沙織が、こんな状態で、ここにいるんだろう。

「どこに行くの!？」

エレベーターに乗り込むと、一階のボタンを押し、続けて「閉」のボタンを押し沙織に思わず叫んでいた。目の前の廊下に向かって目を見開き、ボタンを押し続ける沙織の視線を追った時、あの「手」が目前に迫っていた。骸骨の手だけが、私を捕まえんと骨だけの指を広げ、私達を追いかけてくる。

「ちょ！ 止まれ！！ ふざけんよ！！ てめえ！！」

伸ばされた手に、『捕まってしまう！』恐怖に思わず目を瞑った瞬間、エレベーターの扉が閉じた。体を感じる降下感。状況の変化についていけず、息が上がる。

「あ・・・」

問いかけようとした私の言葉を遮り、沙織は言った。怖い位のまっすぐな目に、この異常な状態が現実であると思ひ知らされる。姿かたちは沙織なのに、醸し出す雰囲気は、全く面影を感じさせない。

とてつもない威圧感を感じる。

「契約は結ばれた。貴方は、もうこの世界に留まる事は出来ない。決めなければならぬ」

「沙織・・・？・・・貴方、誰？」

沙織はそこで一度、一息置き言った。

「New worldに先導する案内役を選択するのだ。私か、先程の骸骨の手か」

私は、思わず沙織の腕を握り締め・・・その自身の手を見て、今自分が大きく震えている事に気付いた。

「わ、私は何も契約なんて」

心臓の高鳴りで、声が上手く出ない。沙織は強い視線を投げたきり、微動だにしない。

「そうだろう。しかしあいつは、貴方の強い失望感を利用して、強引に扉を開けてしまった。

もう時間が無い。手短に言おう。貴方の精神は肉体から引き離され、この狭間の世界のみ存在している。この場所は、New worldの扉が開いている間だけ開かれる。もう幾分もしない内に消滅する。

・・・このエレベーターが下に着くまでに決めなければならぬ」

「死んだの？ 私・・・」

行きたくないって言いたいの、一切の拒絶を許さない物言いに、それだけが言葉として口から出た。滴り落ちる涙は、こんなに熱いの。

「あの光が現れた瞬間に、貴方はあの男の前で倒れた。本来は、この世界との決別を本人が強く望まないと開かれない扉が、貴方を絶望に導く事で強引にこじ開けたのだ。

そのお陰で、開いた扉の衝撃を辿り、私はここに来る事が出来たのだ。お昼に貴方の話を聞いて、目を離さないようにしていたのだが・・・巧妙に隠されてしまった」

体中の血が逆流したかのように、カーと熱くなった。その時の光景が目に見えぬ。慌てふためく上司と、左遷を言い渡されてショック

で倒れた私。

「もう、この世界には戻って来られないの？」

「・・・その希望だけは捨てるのだ。もう貴方はこの世界の所有物ではない」

二人の間に、沈黙が広がった。暫しの間二人は、エレベーターが降下する階数を目で追う。三階のランプが付いた。もう一度沙織を見たが、不動のまま何も言っていない。沙織ですら、味方ではないのかもしれない。当然の様に、この世界との決別を口にするのだから。

戻りたい・・・つい先程までの日常に。それでも、でも分からないけど、もうこれしかないのでしょうか？ 誰と行くかですって？ 心の中で降下する階数を数えた。二階、一階・・・ふーと大きな息を吸った。

「行くわ。貴方と」

（第2章 終わり）

第3章 New Land - 1

強風が女の体を揺らした。外気の冷たさが、体に吹きつける風が、否応が無しに体の自由を奪っていく。

「え？」

『ついさつきまで、エレベーターの中にいた筈・・・なのに？』
混乱する思考を何とか整理しようと躍起になる。しかし生きて味わったことの無い現実には、混乱し困惑し、思考回路が止まった。もう一度、周りの風景に目を向ける。

「同じ・・・どこ？」

どこまでも続く広大な土地、うつそうと続く深い緑の森、遙か遠くには今まで見た事もない巨大な山が目の前に立ちはだかっていた。空には雲が立ち込め、灰色の世界がどこまでも続いていたのだ。

『一体どこまでが現実なの？』

何といっても、そびえ立つ山脈と、同じ高さに存在する自分自身が一番異質ではないか？風で息苦しく、今や女の体はバサバサと風に振られる木の葉の様だ。たまらず隣の沙織の腕を掴んだ・・・筈であった。その時触れた感触に、激しい違和感を覚えなければ。触れた手の感触が、想像していたそれとあまりに違っていたのだ。

受けた衝撃に女はそれを直視し、それも女を静かに見つめていた。

『・・・な、これは何？』

目の前の異質な何かは、明らかに人間ではない。しかし、地球のどれとも違う。

身丈は三メートル位あるだろうか。人間の手に当たるであろう部分は、足のつま先に当たるほど長い。首は飛びだし、顔の半分以上もあるうかという裂けた巨大な口。ギロリとした大きな目は金色に鈍く光り、獣の様に縦に黒い瞳孔が入っていた。それだけでも倒れてしまいそうな程の衝撃なのに、この生物は、静かにそして厳かに

世界の序章を告げる。

「この世界に来たならば、これから起きる筈であるう事由を全て受け入れることだ。貴方の世界の常識はここでは通用しない。

しかし、受け入れなければ・・・そう、決して希望を失ってはならない。何を聞いたかは知らないが、貴方がこの世界に必要なことは確かなのだから。自分がやるべきことを探し出し、その為だけに生きていくのだ」

「あ・・・貴方と一緒に？」

その生き物は、一時置いた後に、

「・・・この世界に来たエンダに同行者はいない。基本、初めは一人だ。我々先導者がエンダと会う事は二度とない。」

この回答は、女を失望させるのに十分すぎた。日本という安全な国で、何不自由なく生きてきたのだ。今、こんな世界に放り出されたら、それこそ直ぐにでも死んでしまう。

「ちよつ！ 待つて。こんな場所で、一人で?? 言語は? 生活の糧は? こんな私に何が出来るの? 私に望むことは何?」

すぎるような気持ちで、問う女に緑の生き物は答えた。

「矛盾に感じるかもしれないが、エンダ個々に望む事は何も無い。この世界で死なずに、生きる事だけだ・・・道は既に作られている」

「既につて・・・どの様に? あの骸骨は、この世界の人々を救ってほしいって言うていたわ。何かあるから、他の世界から私を連れてきたのでしょうか? どうすれば良いの? 教えて! 何を目的にして生きていけば・・・」

何とか喰い下がる女の言葉を、無情にも打ち砕く声が響く。

「今、全てを伝えることは出来ない。貴方が自分で気づかなければ、この世界に来た真の理由は解読出来ない。・・・何故今日という日が訪れたのか、分かる日が必ず来るだろう。今は、ただ生きることだけを考える事だ。　そうでなければ、今日にでも貴方は死ぬ」

目の前の生き物は、女に質問の余地を与えない。しかし「死ぬ」

その言葉だけが、脳裏に何度も木霊する。

『死ぬって・・・そんな世界だったなんて・・・？』

「時間がない。今から始まりの地に連れて行く。初期のエンダが生きて行くのに最適な場所だ。そこから、状況を整えて・・・」

何一つ納得する言葉を得られずに、話が矢継ぎ早に進んでいく事に、女はどうする事も出来ずにいた。しかし刹那、沙織の事を思い出したのだ。

「わ、私・・・自分の事ばかりで。沙織は？ 無事なんでしょうね！？ 沙織に何かしたら・・・！」

何かしたら・・・こんな生き物を目の前にして、何が出来るというのだ。こんなに震えは止まらなくて、異常な世界で体一つで生きている私に。しかし明らかに私が原因で、沙織が巻き込まれたのは揺るがない事実だ。何が起きているのか全く理解は出来ないが、私のせいで沙織に何かあつたらと思うと、生きた心地がしない。

女の言葉に、金色の瞳をジッと向けてその生き物は静かに答えた。

「問題は無い。我々は、直接あなた方の世界の人間に危害を加える事は出来ない。時々あの人間を通じて、貴方の情報を収集させてもらっていた。あの人間を媒体に出来たのも、狭間の世界が開かれたあの瞬間だけだ。あの光に包まれた骸骨も、貴方があの世界に居なければ何の手出しも出来ない。勿論私が近づく事も不可能だ。

あの人間の貴方を思いやる深い優しさのお陰で、あの場に間に合う事が出来た」

今この瞬間だけは、女は恐怖を忘れて目の前の生物にジッと目を向けた。一〇〇%信じた訳ではない。しかし自分を案じてくれていた沙織の優しさは、信じられる。そしてこの生き物にそう言わしめた沙織を思うと、目頭がグツと熱くなる。自分を見つめるその瞳の奥を読み取る事など到底不可能だが、見た目の得体の知れなさは裏腹に、自分を導いてくれた行動を思い返し、漠然と、本当に漠然と、

『信じても良いのだろうか？』

そう思い始めていた。

第3章 New Land - 2

「探した」

突然、別の声がした。この声には聞き覚えがある。このあり得ない状況下で、一番受け入れがたい声が響き、女の体がビクリと揺れた。

『夢なら覚めて!!』

恐る恐る声の方向を振り返ると、目の前には山と見間違っほどの巨体がそびえ立っていた。

「え……」

隣の生き物の比では無い。女の世界では存在しない生物に、息が止まる。しかしその体格の違いに躊躇することなく、緑色の生物は飄々と答えた。

「ほお……よくこの場所が探し出せたものだ」

緑の生き物の言葉に、噴き出す怒りを何とか押さえるように、

「……接点地点を血眼になって探したわ。広い世界だからって、ゆっくり構えてんじゃないよ。こーの盗人が!!」

しかし感情は全て押さえきれず、最後の怒涛が大気を揺らす。この二つの生物の会話の内容から、光の主だと言う事が見て取れる。しかし手だけの骸骨は、今や身丈が一〇メートルもあるつかという巨体と化し、上半身が骸骨、下半身が馬の様な風貌に変わっていた。

声を発している部分が顔なのだが、鋭利な牙……ここからの位置では、それしか見ることが出来ない。

『光の正体はこれだったの!?!』

手だけの骸骨の正体に、体がガクガクと震え、全身に嫌な汗を掻く。女を守る様に立ちはだかる緑の生き物が可愛く見えてしまう程、禍々しい姿だった。

「この女をこの世界に連れてくるだけに、どれだけの時間を要したと思う? 扉を開くまでに五年よ? 親とか仕事とか色々な手回しを重ねて、やっと開いたというのにい? それを横から? 冗談じ

やないよ！」

怒りの咆哮と同時に、ほぼ黒に近い何かと、爆音に世界が包まれる。女が今まで聞いた事も無い割れんばかりの轟音と目の前の現状に、

『死ぬんだ・・・私』

全てを諦めた瞬間だった。

しかし次の瞬間、女は未だに目の前に世界が広がっている事に気がつき驚愕した。

「てめえ」

骸骨は、黒煙を口からブスブス吐きながら、怒りにブルブルと震えている。

緑の生き物と女を守ったのは、光の壁の様な盾だった。荘厳な音と共に、光の盾の周りを見た事がない文字が浮かび上がり、一瞬その文字が大きくなったかと思うと盾と共に消えた。女は、その黒い何かが盾に阻まれた時、それが見たこともない規模の炎だった事に気が付く。

『今の何・・・？ 炎？ 盾？・・・どうやって出したの？』

目の前で繰り広げられる現実を受け入れきれない。

「その攻撃・・・この者を殺す気か？」

「てめえ、何者だ・・・」

全てを燃やしつくしたと確信していたのだろう。予想を反した結果に緊張感が漂う。

「どれだけの時間を有したとしても、この世界に来る者は、自らが扉を開けなければならぬ。それなのに、お前は・・・この世界の秩序を破ったのだ」

何者にも屈しない強い尊厳を保ちながら、緑の生き物は淡々と答えた。

「チツジヨ〜？ てめえ、覇騎王の関係の者か？ 古いしきたりに縛られて、この世界を壊そうとした悪の権現。・・・ふふふ、まさかな。全て滅んだはずだ。」

そもそも、やり方がなんだって？ 正義も悪もねえよ？ 行き着く場所は一つだ。問題は、誰が連れてきたかだ。

ちなみに、こいつは駄目だ。絶対明日にでも死ぬね。だったら、早く次に行きたくて、ね！」

骸骨は、発した言葉と同時に巨大な爪を振り落した。人間の女を捕らえた。と骸骨が思った瞬間、女は緑の生き物の手の中だった。女が、今の自分が手の中に包まれていると認識した瞬間、体に強いGがかかった。体が押しつぶされそうな感覚に目がくらみ、今にも気を失いそうだ。受ける風圧で目を開ける事もままならないが、体を包む感覚で、緑の生き物の手中に居る事は理解出来た。

『あの骸骨から、逃げている？』

緊迫する状況に追い込まれているのに、何故か先程の骸骨の言葉がやけに耳に残る。

『扉を開くまでに五年・・・？』

【この女をこの世界に連れてくるだけに、どれだけの時間を要したと思う？ 扉を開くまでに五年よ？ 親とか仕事とか色々な手回しを重ねて、やっと開いたというのに？】

『親とか仕事とかって・・・お母さん？ 何故お母さんの名前が・・・え？・・・え？』

嫌な汗がジワリと全身から噴出す。「と、止めて」そう、思わず声に出した瞬間だった。更に体全体に強い衝撃が走った。それは脳が揺さぶられたような・・・今まで受けた事がないような強い衝撃を受けた・・・そう感じた瞬間、女は緑の手から投げ出されていた。女は見た。天地の様子。そして緑の生き物が、自分からずっと離れた場所から落下していくのを。女の意識は、ここで途絶えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8274x/>

エンダ

2011年11月7日12時00分発行